

後撰集新抄

春中

二

和書門			
二五三四號	六八函	一五册	類

庫文閣内			
二五三四號	一五册	七架	和書類

内閣文庫		
番號	和 25343	
冊數	15 ( 2 )	
函號	200	38



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak 2007 TM: Kodak



後撰和歌集卷第二新抄

春歌中

町田久成獻納之章

信正  
延書

と かいてほう免の本と一免て何くる年の喜也よとところありて

春源授轉朝臣文庫

同  
同  
同

春  
歌  
中

と 急し時花ハんハも おもそぬふまにちも 免せハまハひハ老にハを  
○ 老後小極ハねハ必ハむハと得ハんハとも思ハをハざりハに今年ハの喜ハもハきつ  
あつハつハあるハをハ免ハれハだハまハことハふハ思ハひハの外ハなハぐハてハあハるハ事ハよ  
とハなハりハ老ハとハふハ年ハのハ喜ハなりハたるハことハふハ免ハるハなりハ古ハ今ハ下ハ引  
○ 急し時花ハもハちハ喜ハまハあハるハ葉ハうつハろハふハ枝ハもハあハんハとハやハえハとハ何ハ  
などの類なり。

祿やのちに叶のあるあややどり結々

藤原伊衡朝臣

竹道く相どこ寐とせどうごひまのなかりきけどおいせりきん  
 ○よどこ寐ハ相寐寝なり朝睡なり俗ハ朝寐とども寐  
 とりも明ことなりいとくも俗ハ寐入とりもことなり俗ニリ  
 といふ身を相寝などかいたたなりとあるまてんり寐ぞい  
 いも寐ぬいをやくわなるなどのいの詞すておなりされど此  
 歌の下向も俗言いへど言のなくなりとまけり相寐がなぬと云  
 きなり雅言よてまといひ相とりまかより免 さへ此の詞  
 あまど俗言ハ此のちり免なまむなり  
 書ハ言のなくるをいなるハ新小ゆづりたるなり古今上書乃  
 本よりかりきむるともあると詞書ありて書とむとやえらん  
 白雪のかきむ枝よ言のなるとある歌かてんして書む相なり  
 やまののみの山をまかると

○まかるとくとくをさるととりきなりまるととりも詞ハも  
 といふ公よゆるを 退く所謂をいふなまども今の系と  
 なるこの詞よとすて系よまれおけうにまきかたなる  
 きのその甲上平にかかるといふあなへゆくをよかるとい  
 ひあけへあるをまうてといへる事になりなること  
 の世の系の詞よも相寝言などたも考よまき詞なり何と  
 考へわして知ると終至大人もいそれなりさてそれより  
 又うけりたが通うる事ともかくさかたにまうるといふ  
 事とハなりなるなりされどぬをぞ城のと  
 僧正通昭

○地名の布留フルを古きまよひをかして、古きより山の標をねど、  
 極々ん時をきくとねど、大和國山辺郡石上イソカミは布留社のあるに、  
 して地名とねど、ねより古きより、雨の降ルもいとねのさる  
 としひらねなりなりなり。冠禱考などにも見たり。  
 花山ハナヤマにて、道徳ミチノトクにけたりとををりか。

○まね山を、はこる通眼の病を患ふる所なり。古今コノイマ志賀よ  
 するりわける女どもの花山よ入て、花のむのまよまきより  
 て、かつりたねよ、ふみくおくりける。僧正通眼ソウジョウツウガンのまに、  
 らん人よ花のむまひまらねよ、枝ををるともとあるも、  
 可ア又マあアまマさサまマれレだダなり。續古今集表傷は花山かまかりり  
けるをえんとりふ 道徳と法師と僧人とねど。

素性法師

山ヤマとていイまマいイまマねネんン言コトさサごゴ乃ノをヲのノのノ標サシをシりシかカざザとト蘇ソ。  
 ○此山の主ミ通眼ツウガンのノとが免マどトがめメきキよヨたタよヨひヒとがめメきキもモは  
 山の標を、そのノもモ不フ足ツだダおオてテかカざザんンとトねネり。二句ハ、  
 免マりリこコとトねネりリをヲたタりリよヨとトのノいイまマさサ下カとトをヲ小コ  
 一ヒつツびビさサのノぬヌむムなナねネばバいイちチるルこコとトをヲ人ヒトとトいイひヒをヲりリ。又マ下カ洞ツツ也ヤ  
 小葉の巻をむりとして、人のいひ傳ねどとあるなど、皆おなじ。  
 多砂の地名もあはれ、さ山のすなり。まいさごの 旧説は、山の標  
 名なりといふ。宜ヨシは、播磨の山所とのと。 尾は、山のさる  
 の、おぼろかよふりうれ方といふ。漢籍戰國策、昔王季歷葬於楚  
 山之尾とあるは、尾猶末也とを引合せて見む、いふくんらね

つゝの結ぶ友ざら  
 みて伊勢がた  
 るはちんをたて  
 かこせりのをせ

ふなり。されを尾上と云ふ山の下のまゝの末より。旅のあつりまでを  
 いひ。即<sup>+</sup>奉<sup>+</sup>ゆるりかもしり。

たよりなきゆゑに。城をうて。友ざらの法うき。たりをせ。

○はうへ。伊勢なれど。いせがとあそあふまに。友ざらとの  
 みいへるも。何のこぐあ。又おこせとりふべきを。法うき  
 といへ。友もさう。すべて。そあれま人の方へ。他<sup>ホカ</sup>よりおこ  
 せ。を法うき。とある。とあらいと。おかう。おち。他の集ま  
 も。何とあせど。おか。おし。つう。ま。れ。と。他へ。やるをこ  
 そいへ。おあ。お。かこせ。を。い。う。さ。は。い。さん。と。つ。く。の  
 結ぶ記されたり。

とみ人あは

橋あいらとむと。き枝なれど。かみ小又。是はなぐさ。ゆきく小

○抄云。橋をいづ。きもむと。かき。ぬ枝なれど。形足など。思ひて。見  
 せ。ば。人。意。く。て。お。か。さ。ら。は。と。なり。 師云。抄の結。ま。一。こ。り  
 寄。を。す。れ。ど。形。あ。い。も。今。か。く。を。う。て。た。く。り。結。く。る。は。橋。を  
 を。見。せ。ば。う。け。く。ま。す。す。れ。る。ま。あ。ひ。枝。つ。き。な。れ。ば。密。を。ひ  
 と。く。な。す。く。ら。れ。て。お。き。を。思。が。か。ま。と。思。ど。か。み。の。ま。の  
 人。の。か。ま。り。に。見。る。物。お。き。ど。や。う。て。は。枝。小。思。が。こ。と。が。思。ひ。出。さ。れ  
 て。か。み。と。思。る。ま。は。か。ん。と。な。ぐ。さ。を。あ。て。て。お。思。ひ。が。せ。う。お。り  
 ち。よ。と。と。る。な。り。抄。よ。い。づ。き。も。む。と。か。き。ぬ。枝。お。れ。ど。い  
 ち。よ。と。と。る。な。り。形。足。な。ど。思。ひ。て。見。せ。ば。人。意。く。て。な。ぐ。さ  
 ま。は。と。り。る。ち。よ。ら。し。



と八雲侍抄等にも見ゆ。

前栽は竹の中にさくらさくらとて

堀上見別

梅まきよく見るとんを<sup>よのまの</sup>梅の一首のまの

○一首のまの

歌あはれ

とみ人あはれ

さくらを<sup>よのまの</sup>梅のまの

○まのなれど梅のまの

ひあることなれどさか

をやぐんれくたぐ

いやふ相思いその

経るるついでに多し

かくよめるなり

と

貞観の時時ゆ

○貞観らヂヤウクワンとよむ

弓のこぞハ抄は融公

さること

河原老大臣

きふ梅あがくふ

○花のやに弓を射なり

てむとぬらうとも

と香共トキよとよ子にて。俗よ香トキる免よとよ子なる。万葉十七小。  
我石の志橋をむご免小玉トキがわがぬくまのトキバクトキ一トキみ。下トキ子。  
根ご免よ風のふきもこきれん。又枕草紙よむらゝご免トキみ新トキご免  
などトキりもトキり。

家よりきき取まらる。時若裁の橋の志よゆひつけ付々。

○抄云。讃岐任玉のころ小や。左近の時時などトキるべし。

菅原右大臣

さうトキ茶トキぬトキを志トキ免トキ物トキあトキふトキきトキこんトキ風トキよトキことトキつトキらトキせトキよ  
○拾遺トキ上トキなトキがトキさトキむトキ付トキ々トキ時トキ家トキのトキ梅トキをトキとトキ付トキはトキ。縮トキ政トキ大臣トキ。兼トキこトキちトキよ  
のトキばトキみトキかトキひトキかトキこトキせトキよトキ梅トキのトキむトキあトキるトキどトキなトキりトキとトキてトキきトキをトキわトキすトキわトキらトキ何トキ  
ふトキとトキけトキりトキ同トキトトキ。

春のころを。

あをやぎ乃系トキよりトキまトキけトキてトキわトキるトキもトキこトキ城トキいトキづトキせトキのトキ山トキ乃トキ系トキりトキまトキふ

○柳の系をよりつ延トキ川トキまトキらトキるトキ号トキのトキ名トキ料トキをトキ機トキをトキ織トキるとトキ足トキのトキ機トキをトキバ  
何トキ下トキのトキ山トキみトキあトキるトキ号トキをトキ来トキてトキ免トキることトキぞトキとトキり。

春のちるをえて。

凡河内躬恒

あひ思をぞうつ縁トキ一トキ色トキをトキ免トキるトキ号トキのトキ浅トキ花トキ小トキあトキるトキ免トキなトキがトキ免トキるトキうトキり

○我々春の上をふよつけ風よつけ。やまトキ免トキもトキなくトキ思トキよトキをトキ免トキはトキまトキらトキ。  
歌トキがトキかくトキ思トキふトキうトキもトキ思トキ免トキんトキのトキすトキふトキあトキるトキをトキ免トキくトキ我トキがトキけトキ思トキひトキと  
いトキよトキのトキなトキりトキ。物トキはトキもトキやトキとトキかくトキ思トキあトキるトキまトキきトキをトキやトキり  
まトキいトキ茶トキよトキあトキるトキきトキもトキせトキぬトキ。心トキ若トキをトキすトキるトキすトキらトキわトキとトキいトキふトキなり。  
おトキ思トキふトキ。  
いトキ方トキのトキ思トキふトキめトキくトキ。かトキなトキるトキうトキりトキもトキ思トキふトキなりトキ。なトキよトキおトキ思トキもトキぬトキとトキいトキふトキ。



月思ひのやになるなり。万葉集十小。お思をであくしんこゆゑ玉の  
珠の光は春日を思ひくさくなどありも同ト。

帰存をきて。

かゝ人あつて

ふかかりを路よまどふなり。まねてあふきつけこの免はる。の勢

春の山風古来風抄

○あたるる子。鳥の聲はかきこえておぼえて空やと。や路は迷ふと思  
ひよせらるなり。金葉夏利とぎれを路よまどふ静すなりをやえ  
だよせよ。み月雨のや。など似ゆるいひさるなり。お新古今あどに  
も。この春風ハ本の芽の出るを芽はるよもい。ど。本の芽はる  
ふららの春風といふさなり。されど。あはさまで。た。春風といふ  
のみふて。本芽といふさなり。いひけん料。松詞のやうにお  
きたるなり。古今又此集よ。この春風あつてもあり。同トはくいさ。雨の

也。

兼崔院のさくらの。たも。ろきすと。延光朝臣のかうり。ゆれど。  
ふるやうもあつま。この夜かど。若と思ひ出く。

大将涉息所

さねさうげ系。り。那つげ。桜花人げ。く。に。や。ま。ん。と。思。ひ。

○は。伊。息。所。ハ。延。喜。の。女。侍。なり。今。ハ。延。喜。帝。崩。御。傳。の。後。の。侍。事。と。言。由。兼

崔院ハ累代の後院なま。帝もね。お。さ。勢。あ。ひ。て。那。此。院。ハ。大。内。一  
ま。し。ほ。げ。な。り。バ。系。も。を。橋。を。え。ん。き。さ。り。お。ま。か。く。人。侍。な。ど。に  
ま。ん。と。ハ。思。ひ。も。う。け。さ。り。お。と。と。昔。の。思。ひ。出。さ。り。く。く。想。  
を。れ。ど。を。橋。の。笑。う。と。も。さ。う。げ。と。も。一。向。よ。さ。や。う。な。る。ゆ。ゑ。な。ど。  
を。我。ハ。ま。か。さ。る。ゆ。り。の。世。と。な。り。され。さ。か。が。ら。孫。さ。い。ま。い。  
サ。カ。ウ。ガ。サ。ク

○後撰集新抄二

ハ

下イカと 出いれをのぼぬきぬれぢちりあふげがよめ歌の何れか  
云きなり。ひなり。

さみ人

喜られ本山一からせおちき夕げくよおがつる

○此系万葉集十に出て。初句喜されが末句山陰おしてとあり。ゆふげ

くよは夕月歌なり。末句ハ万葉にも一本に見。山陰おしてとある方  
ちまざるべし。一首のさハ山陰おして喜られが本原さなきとひ

まかり本の志なりて。月歌の隣らせがらなるとおがつるなくと何  
まづくとわ。古今旅 夕月歌おがつるまきをまづとげおみみの浦  
ちあけくさえぬ。

ふらわら子雲のさる山さみえゆれ梅乃いろむとの城

○山一面山一は梅の咲けどき。さるも一面おまゝなりてあると。山がさるかに

さやうふちわうらげして。皆一色おまゝゆふしをあまたがまゝさる  
まゝなるをさるとばう。おちぎりにまゝさるはとわ。い末句の  
どハなるそのとひまきなり。此系のも梅のいろもまゝとひをな  
をとりのなり。うてとひまきハ力あり。はたふくんにてさる  
な。

大空りおちふをかりたうでもおち喜さる花を風よまらせり

○おちふをかりのち梅オホのとりまきなり。さる大きゆる袖がよあ  
らば。岩おちひ隔て。花を風よハおちさる。竹川花よ梅は  
おちひあまらふちさるとおちふをかり袖ありやハ。おちあ  
ふら。おちさるなり。おちを本奇よとらるる。おちれらまよま  
く見らる。

やまのついでらふろよ。女ははうそ〜け。

なげきさく妻をさるこもわび〜やせとゆとら人よそぬ物うら  
○諸本さく妻をわけて芽の出づきすね人へのなげきといふハ実  
の本はつ〜ハ妻とてもさるすひなきもつなまに人の目よかく  
とゆといふぬものぬの〜やまり我々ん中のなげきも又諸本の  
ぬくもゆるすねまび〜さよとなりなげきのとゆハ目に  
すぬ物をまばかく思ひとゆもさね〜ハあ〜トといふすとふ  
く免らるなり。 本のもゆとハ芽の出るすなげきとゆとハん中  
小思ひこがきて。胸のくさやゆ〜とゆとゆの目トけきさひひよ  
せくさて本の妻をわるといふとゆとゆとハ回トすとなげひ  
ふい〜となり。

妻あのお3ば思ひのま1まなくて六はなげきのめ後とやす  
むとりよ古あの人を女よといひつは〜りけさば  
○こ小あ〜とて。妻あのおハ上下向のるよいの  
なとあハ六帖のあの歌よ〜り。

とえ〜るなげきを妻のさげねまば大〜にこそあれとも見え  
○妻になて本芽の出る時なきばなげきのとゆとの〜も。妻の  
な〜ひぞと思ふゆあよ。〜とありよあれはハ思〜と核カク列レツなるす  
とハ思ひつ〜びとなり。〜さ〜とゆ〜詞をな〜い〜せあ〜らま〜  
ねど〜あ〜さ〜が〜して〜な〜ま〜なり。神代紀ハ神性とか〜さ〜と  
よ〜た〜あ〜りて。契沖法師も〜り〜是彼〜引出〜せ〜り。然れど  
も。神代紀ハ。性字とサガと〜るちか〜ふ〜れ〜も。サガの詞

を性字とのこらぬてハ違ふ事あるなり。古き抄物などハ漢籍又ハ  
日本紀などの文字と引合ふ事多し。それが中ハゆきに何れも  
もあつて一つのふねハなうべきも何れも多し。多くハあつて  
くしてみづりぬる事も多し。されバ、いふに文字よする時  
詞の意を得る事なり。ハ終屋大人もいれ。又縣屋大人のこと  
○こゝ我々の何れも文字ハ奴ヤれだ。いふにもつひてんとい  
もねとるがまことふなぬくの文字とす。人の目ハゆきまきこ  
とふもあつて。

女の子やまつらけ。 長原師尹朝臣

青柳のいとくもあつていふる事には思ひやうなり

○青柳のいとくいふん料なり。又うまハ糸の縁あり。二

向なりゆくうたなり好歌なり。二句のハ文字ハ俗なハ  
なりゆくうたなり。一音のさハ基つてなくアなりゆくうた  
くて我ハいうやうと思ひて志のなんいうやうにも思ひす  
方なくうたなり。新古今。青柳のいとくなるこの比  
とむとすぢにハ思ひやうなり。

情のみやす所の家うづまきよゆき。に。志の花おさるるか  
なりとてをりよはけしりやねだきこえりけ。

○情の消息ハよ。大納言消息とあつて。三条右大臣女能  
子とす。ゆ。消息ハよ。大納言消息の時。延喜抄。更なれ  
り。大將の消息ハよ。後。消息ハよ。み。大將の消息ハよ。  
り。大將の消息ハよ。後。消息ハよ。み。大將の消息ハよ。

情のうづまきよゆき。に。志の花おさるるか  
なりとてをりよはけしりやねだきこえりけ。



○師云我ゆゑに思ひぢけも明き山よ入ぬを。我ハを去とを多不笑  
て山の花の盛と恨小思ひて。花盛の何と去とのこころみんと作る  
盡し。去を恨んとしよ。人きく心もこもれり也。千枝梅  
いづりき。さて思ふぬ某とよふ。思ひもすぬすといふまで。何  
の詞なり。後深橋志法の師と爲る道を去て思ふぬ山よ入  
みさふくねあども同ト。

題不知

宮道寄風

去の比乃玉もすあそぶよを去あーのいと明き去もす。の如  
○よふきの是の如の女まハ是の如くといふさま。あまやをといと  
明きといふん料の序なり。いづれも去もハ休息する所は去もとい  
ふれ也。よふきのといふまを序と見する。誤もいさども。そは去

がこと如く。女の件一由ふりかたふつきて。自の  
是のいと戸なきをいふハあつて。去業抄よ是のいと  
明きと。水音の水あつて安かれども。是をバ障かくかくなり也  
あるが如く。他より見る同々。まといそをーげよハあつて。どの  
の中にも。若しきまも。想しきこと。いづくも。安きまなく  
いと満のなき意をもさる。かかといふをたり。鷺鷥ハ鴨よ交るお  
をういづづりともいへり。鶯鴨のあつてハいとこ  
とわて。あつくと。もく。鳴なり。と冠祥考よ見也。

寛平時。花のいろを去こきて。見をいふんを。よみくまれと。  
おなせしきなれど。

○花の色を去よ。あえてハ。古今通始花のいろを去にふめて。見を  
去とも。去をさふぬ。去を去の山風とある。あつて。いづる。

藤原興風

山風の花乃 さきよふ赤糸 ぬりたる春の赤ぞほろろなりけれ

○かどよも今の人のかどよもいとよも同トくぬきみていざおひびけ

るぬきぬきむとりよよかへてよ免罪と縣番大人いそげよう

ほどいハ刑具の桎梏シラセテカセの桎の義なり古今下小世報のうきめ見そぬ山

海へくなんよもあふ人こそほろろなりけれとあふお同ト

一首のまハ風が花の香をぬきいざおひて物んとする山の葉に

を立ふ免罪のまあが桎ホカなりてんぬきにたさきひ出さかくん

りよとれり

歌一しるべ

よみ人あつて

春乃母乃 足立イ ぬきにたるふもねあつてく花をくそおひ人

○春西のちあつといもん料まあつにはさきも同くなり果ハテさなる

あつよよのにおふまハいそゆるスミのぬのは用ハクとるおききたる

とくあつよよのにおふまハいそゆるスミのぬのは用ハクとるおききたる

とくあつよよのにおふまハいそゆるスミのぬのは用ハクとるおききたる

とくあつよよのにおふまハいそゆるスミのぬのは用ハクとるおききたる

とくあつよよのにおふまハいそゆるスミのぬのは用ハクとるおききたる

とくあつよよのにおふまハいそゆるスミのぬのは用ハクとるおききたる

とくあつよよのにおふまハいそゆるスミのぬのは用ハクとるおききたる

とくあつよよのにおふまハいそゆるスミのぬのは用ハクとるおききたる

とくあつよよのにおふまハいそゆるスミのぬのは用ハクとるおききたる

とくあつよよのにおふまハいそゆるスミのぬのは用ハクとるおききたる

とくあつよよのにおふまハいそゆるスミのぬのは用ハクとるおききたる

の跡より院なり。院をば。似る。詞なきど。りくのまいか。そなり。其ハ  
荒本田次。志主などいへる事なり。院をば。上右二ハ。此等別より  
つゝ免ど。中右より。一つみなり。さる事なり。ゆゑ。あゝとい  
へることハ。あふも。物語書など。ふも。をさく。見あ。此等。あどの  
も。全く。旧と。新と。を。新。向。より。合。せ。る。事。あり。か。て。衆。中。にも。院  
例。あり。され。ば。中。右。以来。の。事。と。かん。み。ハ。そ。あ。ま。あ。ぐ。ひ。て。ん。ね  
べき。なり。あ。ひ。て。詞。の。り。の。こと。に。よ。ん。ハ。又  
中。く。の。相。ど。み。な。い。と。お。る。こと。も。あ。る。べ。し。

京極の侍息女よりかくり侍々。

○此侍息女ハ本院の贈を政大臣時平公の女にて。養子とす。  
て。宇多天皇に奉て。皇子たちをもうとめひこる事なり。

喜をあらわして。やゝわたりなり。ゆくをかりのんね。のるなるべし。  
○此侍息女ハ本院の贈を政大臣時平公の女にて。養子とす。  
一人などの院来り。あふる。あふる。なるべし。かりのんねが  
さるめなるんといふ事にて。かまりゆく事より。あふも。あふる。

と。師翁いそねり。 於試よい。此等。此等。作者と。元良。親王ハ  
と。河。さ。さ。ん。り。下。み。ふ。こと。い。で。記。て。後。ハ。京極の侍息女より。つ。つ。と  
い。ける。可。び。ぬ。ま。バ。今。も。因。ト。な。は。は。か。る。云。く。とい。ふ。侍。息。女。と。  
是。も。是。同。ト。侍。息。女。よ。か。り。多。へ。る。た。れ。ど。なり。かく。る。時。ハ。ち。や  
く。う。り。侍。人。を。通。け。て。お。ま。せ。と。因。一。来。り。よ。ま。ま。に。なり。する。と。  
せん。の。さ。ね。き。す。な。ら。ば。ら。ぬ。と。免。く。お。が。り。て。喜。を。あら。わ。て。ま。あ  
かな。り。ゆく。へ。ま。と。は。の。さ。ゆ。ひ。さ。ら。る。べ。し。二。三。向。の。ま。り。た。ど。  
げ。は。抄。の。儀。の。如。く。ま。わ。り。ぬ。も。ん。と。す。と。り。侍。中。と。ま。ゆ。ら。り。さ  
て。ほ。く。も。程。ひ。さ。か。よ。ま。せ。り。あ。ら。わ。り。つ。る。が。院。ま。た。さ。と  
あ。ふ。可。び。ぬ。ま。バ。今。も。お。ね。ト。ま。は。の。さ。ゆ。ひ。つ。る。と。い。ふ。事。  
ふ。べ。し。



歌あしき

福くまぬを志ひて我ぬる妻の秋の葉をうつになまきりもうぬ  
 ○三向すてら志どしくはるよひなきことほよくとくしてこそお思  
 ひの志げさよしも福くまぬをふく免するなまきり。一首のま  
 ちお思ひの志げくてお覚ゆるうつのるハ若しくたくげさくれ  
 ださるるうしはるハいよ志どしげほふなきはりしはるべし。  
 又思ふ。契仲法師云。妻の秋の葉ハく何ふしよ何まきりよ免  
 是は撰ふ。福くまぬを志ひて又がぬるまき。又「可どあまぬるべし  
 も人を足門のさすまきりかざん妻のよれ葉。新古今云。妻の秋の葉  
 のあるしはつとくとも足しはりよふあつたのらん。又「枕どふ  
 あしきといもど足しはりよ君はるるねよ妻のよれ葉。又「妻の秋の

葉のうき橋とくえして半にまきり。横雲のそ。續子載。あしきと  
 あまきり。とたの免ばら。中。妻の葉と足てまき。貫之集。福くまぬと  
 志ひておとる。妻の秋の葉ハのぎりハあまひなりたり。伊勢集。妻  
 の秋の葉よ何ふりよと足しつまど思ひの終よ。人ぞすく。兼盛集。  
 思ひつ。秋つまばら。川。妻の秋のまきり。お覚よむなり。かきまな。  
 六帖。又。妻の秋の葉ハ免れよ。たのし。う人のう人。うてる。うが  
 び。西行法師。山家集。う。ねぬ。妻。志。と。思ひ。福。よ。ま。き。り。  
 一。く。足。て。う。ね。し。福。く。ま。ぬ。を。志。ひ。て。あ。ま。き。り。と。い。は。れ。り。げ。よ。拾  
 遺。の。い。よ。し。を。い。く。で。う。の。と。思。ふ。身。よ。あ。ま。ひ。の。葉。を。ま。き。り。ま  
 だ。ま。本。さ。ま。き。り。の。葉。さ。は。川。を。こ。ぎ。り。り。と。思。ひ。ま。き。り。あ。ま  
 が。ま。き。り。さ。は。ら。な。あ。ま。き。り。又。書。紀。崇。神。の。傳。卷。四。十。八。年。よ。豊。城。命。と



餘情よえ也。

ヒタガサネ

下製ハ袍の下にのさめる衣なり。

我衣のさうらのいりさうすくとも花のさかあをまきてもまらぬ年  
○花の色を若くとも。整はこゝろ。糸方はあつくもあましくともいふ。  
枝を折ユルの烟をうけく。何やと一たるなり。さて意のこゝかくまわら  
まら。紫木の。色あひをどいらうけく。べとも。さかしく。き行きの  
供奉にも。まてぬまれの。いと。いふなり。

忘るはよける人の家よ。花をあふとて。

○此他者の。わく。い通ひまをねる。が。今と。終る。女の。家よ。花  
をあひ。は。消息。ま。と。て。なり。

兼覽王

年をへて。もの。さ。う。り。ふ。こ。と。く。け。い。と。い。何。が。ね。る。あ。を。や。た。ら。な。ん

○古今

あがれ。いと。あふ。こ。と。を。た。て。ま。な。ど。も。い。ひ。て。花。を。あ。が。ね。る。お。ふ  
い。ひ。な。ら。け。い。と。う。その。花。の。解ツケ。よ。い。か。う。く。消。息。せ。が。整。と。終。て。あ。く  
あ。が。ね。う。と。い。ま。と。う。く。人。と。い。ひ。く。ぬ。て。我。あ。が。ね。る。あ。や。た。ん。と  
なり。花。の。さ。う。ら。も。倍。ま。よ。花。の。つ。い。で。と。い。ふ。ま。な。り。六。板。あ。ら。ま  
ね。く。花。の。さ。う。ら。ふ。と。ま。も。れ。が。我。ま。あ。が。ね。な。り。ぬ。ま。ら。な。り。ま。ま  
集。ま。れ。ね。く。ま。ま。の。ま。ま。と。い。ひ。ま。ま。花。の。さ。う。ら。に。見。ゆ。る。な。り。け  
り。あ。が。ね。多。く。あ。り。い。ま。の。倍。ま。よ。倍。ま。て。と。い。ふ。ま。ま。と。い。ふ。ま。ま。  
よ。ふ。こ。と。を。ま。て。と。あ。ら。の。家。よ。あ。ら。り。付。ま。る。

○うぶこまの。深山も。里にも。おふも。屋にも。林を。な。ま。に。も。よ  
み。ま。る。芥。万。葉。ま。ま。け。た。め。か。ひ。く。よ。ま。ま。ら。り。縣。居。大。人。の。  
右。今。お。今。の。倍。ま。か。ん。こ。と。ま。ま。か。つ。あ。ら。り。と。い。ふ。ま。ま。の。な。ま。ら。ん  
註。よ。



て見むばのれと一りことねく鳩とゆるやうにさす也  
不なり すべてかききりすけあききり先万かしく思ふも  
おぼよく明らめーきるうとくもむむまどいとやまきりどもと  
どもとどおいきまどえよくもまきまどききりどもと  
えてまげうまきりとあききりんとするをいとあぢききり  
まきりなりよくまきりといひて人もいとあぢきり思ひ  
の外なるおがくろえの多うるおなまきりすけたすきこ  
とをやく度もうさひうむかへといひもゆきえてよくねと  
らんねとこそかきまきりとを思ひうくべきまきりかきと  
登る人もいさきりうさねどくまきりなりとてむげお思  
ひもうけむさーおらんもまきりうさきりなりとてむげお思  
どまきりうさきりうさきりうさきりなりとてむげお思  
むうりうさきりうさきりうさきりなりとてむげお思  
ゆべきことねまきり今ことついでまきりなり

妻通つて記

我者乃花より明らきよよこまよぶうひもて思もまなかり  
○あれくにもおぬよなり。はがよぶとて、隣家の人もおぬればさうに

よぶうひもなり。されど我者の花よなくすなりねと。まよ合すよ  
いふて、さて隣の人のおうとれを恨ておくりたるまなり。  
生忠考がた邊のつぐひのとさかて、ふとたおせくゆるはい  
でよ。おとうらみてゆるはすよ。

○抄云。た邊のつぐひのをさとい。た邊の番長とつぐひなり。  
古今。お考がまよふて。むう。をまきまきり。お考なりと。  
よみーおなり。おとうらみて。た邊の番長ハ。大將以下の判  
授の友かて。半後なるおの述懐をいふあるべーといひ。左  
邊衛府す。舍人。番長。おのす。妻い。まきり。お考なりと。  
ど。お考がまよふて。むう。を合せて。お考なり。

きの費之

うらぬとていひ。おぬよなり。はがよぶとて、隣家の人もおぬればさうに

○つづつ小をすくおけち。使てやこうぶまにちあつば。今罪違あ  
 ぶべき世バ古まものよして。兄すてらまき。やうなる。ななりとて。  
 甚しくむびやうこと。船の世とたり。 喜雨のハ。ふりぬ。やむべきを  
 といまん料なり。



後撰和歌集卷第二新抄



萬葉集畧解目錄全二冊 尾州名古屋本町寺目 永樂屋東四郎

此書と稱の千蔭丈人著せる畧解の目錄ありて古より未訓点の詳々  
 可なりを初学の爲に考へて古を訂し訓点を施し今の代に通じ  
 易のしめもこと重くくの類をもて牽強求むる便とす。簡教を  
 記し又校異本註丁教とも並べ記し其類毎の字を五十類に  
 あてて便於に備へたり。今に訓点を熟讀し其古人の名おび  
 官名地名等の讀法を淺里古云の意をも得むるなり。

